白鷗大学論集　第10巻 第２号（1996）239～282

論　文

我がスペイン語教師生活４０年を振り返って

原　　誠

目　　次

0　はじめに
1　東京外国語大学入学
2　副手時代
3　助手時代
4　講師時代
5　助教授時代
6　教授に昇任
7　終わりに

○　初めに

筆者の父親は軍人で、中国にも行っているが専門が薬剤関係だったので、前線に立って弾丸に当たり無駄死にをすることもなく、帰国した。その後太平洋戦争が始まった時は東京第一陸軍病院勤務、日本の敗色濃厚となった一九四三年福岡第二陸軍病院に転任になった。筆者も父に従って小学校五、六年をかの地で終え、日本の敗戦直後福岡県立筑紫中学校（現福岡県立筑紫ケ丘高等学校）に入学第二学年まで在学した。一方父親は敗戦当時陸軍薬剤中佐であった関係上、公職追放令に引っかかって、公務員を辞めざるをえなくなり、旧上官のコネでさる製薬会社の工場長にトラヴァーユする。筆者もそれにつれて横浜市鶴見区に移り住み、当時横浜市の三つのナンバー・スクールのうち唯一戦災を免れた神奈川県立横浜第二高等学校併設中学校に転入学（自分の学歴に多大なコンプレックスを抱いていた教育パパによる越境入学であった）する。この部分を読んだ人は筆者はなぜこのように回りくどい表現をするのかといぶかるかもしれない。実は敗戦直後占領軍の命により日本の教育制度に大幅に改革のメスがふるわれた。そのため旧制中学校は三年制の新制高等学校に姿を変える。その関係で筆者の在学していた筑紫中学校へは筆者の次の学年は入学して来ず、その連中は新制中学校へ行ってしまった。従って横浜へ移ってきても後輩には恵まれなかったが、その代わり高校入試を免れ、無試験で横浜第二高等学校に入学できた。しかしこのあとの三年間は波乱万丈であった。まず高一になったとたん、高校側が事務職員もいないのに、大学のような科目の選択制（これをモザイク制と呼んだ）をとったので、授業開始が大幅に遅れたという苦い思い出が残っている。高一の時の苦い思い出はそれだけではない。おそらくは占領軍兵士のタバコの火の不始末なのだろうが、初冬の頃校舎が全焼してしまった。父が息子を横浜二中に越境入学までさせた唯一の理由が、同校が戦災にあっていないということであったというのに…。結局神奈川県立横浜第一高等女学校（現平沼高校）に間借りすることになった。しかしあちらは名だたる女子高、こちらはニキビ高校生、当然「これより先二高生の立入りを禁ず」という立て札が立ち、我々は

これを自嘲気味に38度線と呼んでいた。あとから知ったことだが当時横浜一女高には一学年上に草笛光子と岸恵子がいたのである。そうと知っていれば、もう少し校舎の貸し主たちに関心を示しておけばよかった。というわけで折角のモザイク制のおかげで好きな先生の授業と興味の持てる課目ばかり選んでいたのに、火災のためにすべてオジャンになり、大嫌いな図画の授業を押しつけられたり下らない授業をする漢文の先生に悩まされたりした。そうこうするうちに二年になり、木造のバラック校舎に戻ることになったが、夏が近づいてくるとその暑いことといったらなかった。その中でそろそろ大学受験の準備にもとりかからねばならなかったのだが、そのためのエンジンのかかりは恐ろしくのろかった。その理由をいま振り返ってみると、まず第一に高校生になってから暗記力を完全に失ってしまったことが挙げられる。ずっとのちに研究者になってからなら、暗記力などという下らないものは全く不必要であったが、大学受験期に暗記力がないということは大変なハンディーである。早い話が生物や世界史といった暗記物はどうにもならない。これがのちの大学受験失敗の第一の伏線となる。最近はさすがにさまざまな非難を食らってやめたのだろうが、あの頃は世界史上の出来事、それも年代的に非常に近接した五つの出来事が、でたらめに並べてあって、それを年代順に並べかえよといった愚問が横行していた。こういう言わば○×式の試験方法は、敗戦後占領軍の命によってアメリカから導入されたもので、アチーヴメント・テストとか、進学適性検査とか呼ばれていた。筆者は1952年春三つの国立大学を受験したが、その前に必ず進学適性検査を受けねばならなかった。現在の入試センター試験の前身であるが、とにかく実に下らない代物であった。受験生の方は何とか大学に入りたいから、課せられた試験を無批判に必死になってクリアしようとするが、各受験生の不満・怨念等を合計したら莫大な量になることだろう。あのような形式の試験を施行することによって、青年が大学に入ってもっともあるいは唯一必要とされる個性的な思考力が失われてしまうのだ。戦前あるいは敗戦直後の入試はほとんどすべて論述式ではなかったろうか。筑紫中学校の若い東洋史の近藤先生は授業では言わば縦に、

つまり年代順に講義されたが、試験問題は横に、つまり共時的に記述せよという大変凝ったテーマを出された。歴史は棒暗記と決め込んでいた我々生徒は大いに面食らい、さんざんの出来であったが、筆者はなぜか81点をとり、全学年で最高だったとか。自慢のしついでにもう一つ、横浜二中へ移ってきてからも、どういうわけか「実業」という名の授業があり、「ガス」という綽名の化学の先生が担当しておられた。内容は完全に忘れてしまったが、先生がプリントを配布され、それを読み上げて説明を加えるという単純な授業であったが、この試験がプリント持込可の論述式であった。暗記物でなければ任せておけとばかりに書きまくったら、40名くらいのクラスでただ一人「優」をとったのが筆者であった。こういうことが積み重なると、人間は益々暗記物が嫌いになり、すべて持込可の論述式の試験が大好きになってしまう。そういうわけで、東京外国語大学で１・２年生向けの「スペイン語とはどんな言語か」とか、３・４年生向けの「スペイン語学概論」とかの授業では時間無制限、何でも持込可の試験をやるようになってしまった。2年生の西作文の試験まで和西辞典持込可にしてしまったが、これは少々行き過ぎかな？

とにもかくにも暗記のできない劣等感がひいては受験勉強全体への疑問と結びついてしまった。これが第２の理由である。最近はいくつかの私立大学の入試で英和辞典持込可というケースが増えてきているようで大変結構なことだと思う。東大でも分離分割方式の入試を採用するようになったが、その後期の方の入試は完全な論述式である。このような論述式への疑問は、採点者の主観が入ってしかも採点がしにくいということにある。ところが筆者には論述式の答案の採点は意外に容易なのである。西作文の答案の採点が最も大変である。なぜなら幾通りもの答がありうるからで、しかも筆者には原語民の直観がないから、判断に窮した場合にはネイティヴ・スピーカーに電話をかけてうかがいを立てねばならない。これに対して論述式の答案は起承転結の構成がしっかりしていて、結論へと導いていく説得力が充分であるか否かで判断すればよいのであるから楽なのである。40年もスペイン語の教師を勤めてきて、最近とみに感じることは、我々教師はもちろんのことだが、学

生にとっても、それがたとえスペイン語学科の学生であっても、日本語でしっかりした文章の書けない人はどうしようもないということである。極端に言えば、たとえスペイン語学科の学生であろうとも、自分の主張が立派な日本語の文章で書けるようになれば、それで立派に外国語学部スペイン語学科を卒業したと言えるとまで筆者は主張したい。我々日本人はもっともっと日本語で文章を書くことに意を用いて然るべきであると思う。その点どういう意図でなのか分からないが、アルゼンチンやドミニカで育ち、スペイン語話者と同じくらい上手にスペイン語の話せる女子学生が東京外国語大学スペイン語学科に入学してくるが、やはり彼女らの難点は日本語での表現力にあると思う。しかもこれは我々スペイン語の教師に大いに責任があると思うのだが、入学時以上にはスペイン語への興味を抱かないというケースが大半である。もっとよく彼女らと個人面談して何を考えているのかを聞き、親身になって彼女らの立場を理解してやればよかったと今頃になって反省しきりである。筆が進むにつれてどんどん脱線していくようだ――これは典型的な老化現象である――が、要するに筆者はこの箇所で、大学というところは学生が自分の頭でものを考えられるように、自分の目でものが見られるように指導をする場所であらねばならぬ、それなのに知識の多寡をきくような問題ばかり出して、知識を多く詰め込んだ人が勝利者となるということでは困るということだけを主張したかったのである。そう言えば、今から15年前、スペイン王立アカデミーの文法書を教科書として用いていて、試験に日本語で自分の考えを書かせるような問題を出したことがあったが、ある実に下らない事件のために、筆者の出題方針が当時のスペイン語学科の教官の間で論争になったことがあった。つまり筆者の出題方針に批判的な教官は、2年生まではスペイン語の基礎を固める時期なのだから、学生一人ひとりの考えをきくような問題は出すべきでなく、スペイン語の基礎知識を身につけているかどうかを見られるような問題だけを出すべきだと主張した。スペイン語学科の教官会議でスッタモンダの議論のあげく、筆者の考えは承認されたが、筆者としてはスペイン語の基礎知識をきいた上で、しかも学生一人ひとりの考えをきけ

るような問題を出すのが好きである。

受験勉強に熱心になれなかった第３の理由は、筆者が恋をしたことである。筆者は当時鶴見に住んでいて、そこから横浜まで旧国電に乗り、横浜駅西口から翠嵐高校までは朴歯の下駄をはいて20分歩いて通っていた。その途中、朝の鶴見駅のプラットフォームである一人のフェリス女学院の女子高校生から筆者の目は離れなくなってしまった。あの人は果たして美人だったのだろうか、それとも普通の容貌の持主だったのであろうか、当時松竹（？）の女優で、小林トシ子という人がいたが、彼女によく似ていたからやはり美人だったのだろう。とうとう筆者は高校に着くには少し早過ぎるのだが、毎朝彼女に会えるような時刻に家を出るようになってしまった。以後約２年間にわたって筆者の毎朝の電車通学は至極楽しいものとなったが、彼女と言葉を交わす機会はついに一度もなかった。彼女とはよほどご縁があったのであろうか、筆者が東京外国語大学に入学して京浜東北線で田端まで乗るようになっても、共立女子大に入学した彼女とまた一緒の電車に乗るようになった。ある時帰りに鶴見駅で一緒になったので、彼女の乗る横浜市営バス「駒岡」行に筆者も乗ったところ、たしか彼女は「上末吉」という停留所で降りた。そこで筆者も慌てて降りて彼女のあとをついていったところ、彼女の入った家には「山下国義」という表札が出ていた。かくして彼女の姓だけは筆者には「山下」であるということが分かっている。それからしばらくして京浜東北線の車内で彼女がある背の高い男性と楽しそうに話しているのを見かけた。以後だんだんと筆者は彼女の乗る電車に乗らなくなり、その次に彼女を見かけたのはやはり「駒岡」行のバスの中、すっかりＯＬらしくなって、しかも少し太目になっていた。今でもその時の彼女の口紅の赤さが目に浮かんでくる。それが彼女と会った最後であった。今頃はいいお婆さんになっていることだろう。筆者がこんな白髪の爺さんになっている以上は。しかし筆者の受験勉強にとって彼女の存在は邪魔になったことだけはたしかである。だんだんと筆者の大学受験の失敗についてみっともない言い訳が積み重なるようで、筆者自身も嫌になってきたのだが、筆者の大学受験失敗の第４の原因も挙げて

おかねばなるまい。

それは高一の頃であったと思うが、ある製薬会社の鶴見工場の二階に住んでいた筆者は階下の事務室のおんボロラジオで何かの番組を聴いていたらしい。そこへ流れ出したのが忘れもしない、ヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」であった。この時筆者は、それが素人にも最もとっつきやすいワルツだったこともあって、ドナウ河がとうとうと流れる光景が眼前に浮かんできて、未だかつて経験したことのなかった、素晴らしい感動を覚えたのだった。さあそれからというもの、勉強そっちのけで音楽を聴きまくった。初めはやはりモーツァルトの曲の美しさに魅せられて、これ以上に美しい音楽はないと思っていたのだが、やがてロマン派に関心が移り、メンデルスゾーン、シューマン、チャイコフスキーを愛聴するようになった。この頃はまだバッハの良さは全然分からなかった。要するにメロディーの美しさにうっとりとしているだけで充分だったのである。従ってワグナーやリストにはいささか辟易したものであった。ましてやそれ以後の近代や現代の音楽となると、その音の汚さに完全にお手上げであった。ただし近代といっても、ラフマニノフやシベリウスのようなメロディーの美しい作曲家はこの範疇から外れる。このように筆者があまりに音楽に凝ってしまったので、心配した両親は、敗戦後初めて来日した外国人演奏家、ヴァイオリンのユーディー・メニューインの切符を買ってくれ、この演奏会に行ってもいいから、そのあとは音楽はやめにして受験勉強に専心してくれと言った。両親には申訳ないことをしたが、両親とのこの約束を筆者が守ったかどうかについては記憶が定かではない。おそらく守らなかったのではなかろうか。ところでメニューインのピアノ伴奏者はアドルフ・バラー、曲目はブラームスのヴァイオリン・ソナタ第三番とパガニーニの、あの有名なラ・カンパネルラのメロディーが出てくるヴァイオリン協奏曲第二番と、この二曲は覚えているが、あとの曲目はすっかり忘れてしまった。生演奏に接したのが初めてだったこともあり、また筆者の音楽鑑賞能力もこの上なく低かったことも手伝って、メニューインの演奏に感激したという記憶はまったくない。豚に真珠とはこのことだろう。

そうこうするうちに、きれいなメロディーにも飽きた筆者はドビュッシーやプロコフィエフの音が苦にならなくなってきた。次の段階ではバルトークやシェーンベルクに関心が移り、これは大学入学以後のことであるが、定期演奏会のプログラムに必ず現代曲を一曲加えることにしていた東京交響楽団の定期会員になったこともあった。とうとう筆者のこの悪（？）趣味は嵩じて、だいぶ以前から邦人作曲家の新作に最大の関心を払うようになってしまった。62歳のこの年になっても、この悪（？）趣味は変わっていない。

このような状態で大学受験の成功者となることができるであろうか。とんでもない話である。父親は敗戦によって軍人を辞め、会社員になったが、当然のことながら安月給。「お前を私立大学に通わせる財力は俺にはないから、済まぬが国立大学を受けて合格してくれ」と言われてしまった。当時は、現在のＡ日程、Ｂ日程、Ｃ日程の制度と似ていて、国立大学は一期校と二期校とに分かれていて、前者は旧帝国大学を初めとする戦前からの旧制大学、後者が旧制の高等学校、専門学校が昇格したいわゆる新制大学というふうになっていた。両者間には明白な差別があり、二期校は一期校の落武者を救い上げるようなシステムになっていた。一期校の入学試験解禁日は３月３日、二期校の解禁が３月23日であったと記憶している。父親は軍人でありながら、東大閥にさんざん煮え湯を飲まされたせいだろう、息子は絶対に東大に入学させたいと思っていたようだ。息子の方は漠然とではあるが、東京外国語大学の英米語学科にあこがれていた。しかしこの息子の漠然たるあこがれも、父親の旧制松江中学時代の同級生で、当時の東京外国語大学インド語学科の主任教授蒲生礼一先生の「ああ、それはスペイン語がいい」という鶴の一声で、スペイン語学科志望に変わってしまったのであった。いかに当時の筆者に主体性がなかったかということをこの話は物語っている。しかもこの時何となくスペイン語学科志望にしたことによって筆者の一生は定まってしまったのだから、人生は面白いと言ったらいいのか、筆者に環境適応性がそなわっていたと言ったらいいのか、はたまた筆者がいままで出たとこ勝負でずっとやってきたと言ったらいいのか。どうやらこの最後の表現が一番当たっているよ

うに、62歳になった筆者には思える。さて話を東大の入試に戻そう。３月３日午前は国語、午後数学、同４日午前英語、午後社会、同５日理科という日程で五教科の試験がおこなわれたのだが、今思い出してもゾッとするのは、数学と社会と理科については各二教科ずつ受験せねばならなかったことである。仕方がないので（？）、数学については解析Ｉと解析II、社会については一般社会と日本史、理科については化学と生物を選んだ。すべての科目について答案が満足に書けたという記憶がまったくないのだが、おそらく生物は０点であったろう。また解析Ｉについても三題のうち一題は平方根つきの数字の微分の問題で、これについては完全に白紙の答案を出さざるをえなかった。このようにみじめな出来であったにも関わらず、両親にせかされて一応発表を見に行ったが、筆者の名前があるはずがないではないか。発表はたしか３月26日だったと思うが、帰宅すると食事もせずに蒲団にもぐりこんで一応は口惜し涙に暮れたことは暮れたのである。二期校の入試は前述の通り３月23日から始まったのだが、どうしてだかいまだに分からないのだが、筆者は23日に東京外国語大学、24、25日の両日横浜国立大学経済学部を受験することができた。当時の横浜国立大学経済学部は大変競争率が高く、何と26倍であったから、非常な難関であったと言うことができよう。受験科目は東大に比べて少なく五つ、しかしこれまた問題なく不合格、一緒に発表を見に行った高校時代の親友は合格していたから、帰りは筆者にとって大変みじめなことになった。親友の方も筆者がいるばかりに合格を心の底から喜べず、筆者に対して何を言ってよいか分からず、だいぶ困ったらしい。思うに、不勉強であった上に、科目によって得手・不得手の波が激しかったから、東大にせよ横国大にせよ不合格は当然のことであった。前述の通り、暗記物の世界史、生物は苦手、しかし日本史は子供の時から興味があったので、暗記をせずとも自然に身についていた。東大入試の際は一般社会が暗記物でないということで選んだが、果たして何点取れたことやら。東外大受験の際は今思い出しても大変面白いことがあった。社会については人文地理、日本史、世界史、一般社会の問題がすべて配布され、たしか30分以内にそのうちのどれ

を選ぶかを決めねばならなかった。筆者は一般社会での受験を希望していたのだが、問題を見たら難解なので急拠日本史に変更した覚えがある。東外大は当時数学で受験する必要がなく、全国から数学の苦手な若者が多数受験したものだった。しかし筆者は数学はさして不得意ではなかったから、それで東外大受験を志したわけではない。理科も化学だけは大好きで、とくに計算問題は大の得意であった。横国大も東外大も理科は化学で受験した。しかし何と言っても得意でもあり、好きでもあったのは、暗記物の文学史を除く国語と、英語、それもとくに英文法であった。国語の方でも文法と漢字の書取りだけはだれにも負けなかった。従って今頃になって気がついたことだが、筆者の専門が、とくに文法に代表されるスペイン語学であったことは正解であったのではなかろうか。

1．東京外国語大学入学

東外大の入試問題はヘンに易し過ぎて筆者は合格できるような答案を書いたという気が全然しなかった。しかも東大と横国大を不合格になったショックも手伝って、もう浪人することを覚悟の上で、半ばふてくされ気味に４月５日の発表を見に行った。我が受験番号1256番は、二度あることは三度あるで、またもやないであろうと半ばあきらめ気味に上を見上げたところ、何とその番号があるではないか。何遍見直してもその番号はたしかにあるのである。そこで普通の人なら万歳を三唱するところなのだろうが、この時の筆者は意外に冷静で、「ああこれで浪人を免れた」というのが正直な感想であった。事実家へ帰ってきて母親に向かってやはり「浪人を免れたよ」と言った覚えがある。それにしてもこれから四年間スペイン語という自分にとって全く未知の言語を学ぶことになるということを真剣に考えた時、筆者は目の前が真っ暗になるのを覚えた。なにせスペイン語はロマンス諸語の一つで、フランス語、イタリヤ語、ポルトガル語といった諸言語と姉妹関係にあること、英語のとくに抽象名詞の中には綴りも意味もスペイン語のそれとよく似たものがあること等を知らなかったのだから。ひょっとして中南米に19か国もス

ペイン語を公用語としている国があることすら知らなかったのではなかろうか。しかし案ずるより生むが易し、いざスペイン語の授業が始まってみると、発音は日本人向きで比較的平易であるし、文法もなるほど動詞の活用が複雑ではあったが、なにせ当方はスペイン語に多大の興味を抱き始めていたから、動詞の活用体系を棒暗記する必要などまったくなく、自然にスルスルと身についていくのだった。しかし同時に入学した学生全部が筆者と同じようにスペイン語に興味を抱いたわけでは決してない。なにせ我々は東大・一橋大の落武者である。ということはスペイン語学科へ入ってきても、法学部や経済学部が第一志望であった人たちが多かったということである。そういう人たちが海妻玄彦先生の法学概論や五島茂先生の経済学に満足できるはずがない。他方スペイン語にももちろん興味はもてない。なぜならいままでの中学・高校の英語教育法とは異なった、いわば大学らしいスペイン語の教育法があるはずもなく、英語を学び始めた時と同じくスペイン語についても「アー、ベー、セー、チェー、デー」から始めざるをえないにも関わらず、こういう人たちには、自分たちが入学しそこねた大学では入学者は初めから高邁な講義を受けているように見えてしまうのが普通であろうから。従って三人入学したはずの女子学生が賢明にも（？）まず去っていき、五人入学した小林君のうち二人が他大学受験のため辞めていった。当時のスペイン語学科の定員は40名であったにも関わらず、卒業時には30名になっていた。しかし今になって考えてみると、よくもこれだけ残ったものだと思う。

東外大の授業のことはまたのちほど語るとして、この辺で校舎のことを述べておこう。筆者が在学した学校の校舎に関する限り、筆者は不運の一語に尽きると思う。まず中野区立桃園第三尋常小学校、これにも父親は越境入学させたのであったが、筆者が入学する直前、父親の越境入学の罰が当たったのであろうか、その木造校舎は原因不明の火事で半焼してしまい、入学当初は早番・遅番の二部制であった。五年生になった時、福岡市立三宅小学校に転校したが、これまたあまり上等とは言えぬ木造校舎であった。しかし唯一例外は筆者が二年間在学した福岡県立筑紫中学校であり、これは実に立派な

鉄筋コンクリートの二階建であった。従って三年の時横浜二中に転校してきた時は「また木造校舎か」とがっかりした。前述の火災ののち一時的に間借りしていた横浜第一女子高等学校は実に堂々たる鉄筋コンクリートの校舎であった。間借りが終わったあとのあのバラック校舎についてはもはや思い出したくもない。校舎についてこのような辛酸をなめて東京外国語大学に入学した筆者は、お粗末この上ない木造校舎を見てもがっかりすることは全然なかった。それどころか上履きを用意する必要はないし、放課後の掃除当番はないしで大満足であった。当時の東外大は100パーセント木造校舎であったかというと、実はそうではない。現在のロの字型の一号館の北側の部分がほんの一部できあがっていて、なぜか金曜三限の笠井鎮夫先生の授業だけがその鉄筋コンクリートの部分でおこなわれた。ただし今と違って床は板張りであったが。最近の東外大の学生は向かいの武蔵野女子高に比べて東外大の校舎は何と貧弱なことかと言って嘆くが、その校舎が何度も火災にあっている筆者にとっては現在の東京外国語大学の校舎には何の文句も言うことができない。ただこれだけのキャンパスに学生を採用し過ぎたことだけはたしかである。いずれ今の西ケ原から府中のキャンパスへと移転するであろうが、東京外国語大学の唯一のとりえは全国国立大学の中で最後から二番目に小さく、従って教官と学生との間が近いことだと思っている筆者にとっては、府中移転は益々人間疎外を進めるだけではないかと心配でならない。要は校舎はいくらオンボロでもいいから、中で大学らしい立派な授業さえおこなわれていればそれでよいのである。

話を東外大の入学式に戻そう。当時本館から一段下がった、キャンパスの最南端に47番と最も大きな48番の２教室から成るバラック建て校舎があった。その48番で入学式がおこなわれたのであったが、正直言って沢田節蔵学長の話には失望した。思い切って要約するならば、彼の話は「諸君は国際人にならねばならない」ということに尽きた。その通り、我々は国際人にならねばならなかったし、1952年に東外大に入学した我々の仲間からは事実国際人が輩出した。その意味で沢田学長の我々への期待は決して間違ってはいなかっ

た。ただなぜだかはっきりしないが、我々への説得力に欠けるところがあったこともたしかである。やはり彼は外交官上がりであって、学問をした人ではなかったからではなかろうかというのが、あれから43年後に筆者がおこなった浅はかな推測である。

入学式の翌日はガイダンス、その次の日は火曜日だったと記憶しているが、その日からいよいよ授業が始まった。早起きして一限の心理学の安倍北夫先生の授業に出てみたが、先生にちょっとキザなところがあったのと、遠慮なく「不可」がついてくるという噂とに恐れをなして、翌週から稲田正次先生の「憲法」に鞍替えしてしまった。稲田先生は当時東京教育大から講師として出講しておられたが、明治憲法制定の経緯を歯に衣着せぬ表現で批判され、マルクス・ボーイになりかけていた筆者にはその講義は大変心地よく耳に入ってきた。この稲田先生の講義がおこなわれたのが、入学式のおこなわれた48番という大（？）教室の隣の47番教室、おそらく当時の東外大のありとあらゆるお粗末な教室の中でも最も貧相な教室ではなかったろうか。卓球部員たちは放課後机と椅子を片付けてそこに卓球台を出し練習をするという有様で、たしか台は１台しか出せなかったのではなかろうか。その同じ47番教室で二限には宮城昇先生のスペイン語の授業がおこなわれた。先生には未だにその訥弁がいささか残っているが、当時はもっとボソボソとスペイン語を学ぶ心構えについて話されたあと、笠井鎮夫先生の「スペイン語４週間」を使って直ちにアルファベットの発音を教えてくださった。筆者の大の恩師の一人である。昼食後の三限は海江田進先生の英語の授業、ご自分でも英作文に興味を持っておられたせいか、よく英作文の課題を我々にお出しになった。しかし大学教授らしい授業という感じはあまりしなかった。火曜日はこのあと四限に海妻玄彦先生の法学概論があったが、先生ご病気のため開講が大幅に遅れ、しかもあまり有益とは言えない講義であった。

水曜日は一限が荒井正道先生のスペイン語、図書館に多数購入されていた、今で言うオーディオ・ヴィジュアル的メソッドによる教科書を二人に一冊ずつ貸与されて、いわばモダンな授業を進められたが、「俺は君らに教えてや

るんだ」という態度をとるのがお嫌いであり、また学生の質問を受けるのがお嫌いであったし、非常な皮肉屋でもいらしたので、一部の学生からは蛇蝎のごとくに嫌われた。しかしよく聴いていると、時々ピカリと光るところのある、味のある授業であった。この方もまた筆者の最大の恩師の一人である。二限は会田由（あいだ・ゆう）先生のスペイン語の授業。ちょっとおかしなスペイン語の発音ではあったが、最初の授業からサンスクリットの寓話集「カリーラとディムナ」のスペイン語版をお使いになって、訳読の授業であった。言わずと知れた、かのドン・キホーテを、英訳など通さずにスペイン語から直接日本語へと全訳された最初の方である。従ってスペイン文学専攻でいらっしゃったにも関わらず、最初の頃は行き当たりばったりではあっても系統的にではなかったけれども、実に詳細に、しかも分かり易く文法を教えてくださった。私の親友などはすっかり感心して「あれこそ大学の授業だなあ」と言っていた。筆者も会田先生を真似して、助手に採用されての一年目と二年目の授業ではこの方式を用いてみたが、今はいいおじさん・おばさんになっているあの頃の学生さんの評判はどうだったのだろうか。それはともかく会田先生は筆者の最大の恩師である。

木曜日は一限は雀部（ささべ）峻三先生の数学である。八時半きっかりに教室（40番）にいらっしゃるので、毎回出席するのは相当辛かったが、数学史の面白さにつられて真面目に出席し、ノートも綿密にとり、しかも試験も自分ではよくできたつもりであったが、なぜか評点は「良」であった。これは今頃になって悟ったことであるが、もし評点に不満があったら、やはり先生の元へ答案を見せてもらいに行くべきである。しかし雀部先生は学習院大学から出講しておられた非常勤講師であったから、つい億劫になってやめてしまった。二限は仏教学者として著名な増谷文雄先生の哲学、ソクラテスからカントまでの西洋哲学史を講義されたが、その話術のうまさにうっとりとしてしまった。しかし受験勉強ばかりでソクラテスやカントはおろか、哲学自体に関心のなかった筆者には、カントから出題すると先生がおっしゃったにも関わらず、そしてけっこうよくそのための勉強をしてあったにも関わら

ず、「可」をいただいてしまった。それ以後哲学が苦手になって困ったが、現在では言語学を経由して哲学にまで筆者の関心が及んでいるのは何という皮肉であろうか。木曜三限はムニョース先生のスペイン語の授業。雨が降ると休講になるというお爺ちゃんで、我々に対してスペイン語を教えてやろうというようなファイトは全然感じられなかったが、のちになって副手に採用され、研究室で１対１でお話をうかがうようになって初めてこのスペイン人のお爺ちゃんの真価が分かった。教養はあるし、ユーモアには富んでいるしで、素晴らしいスペイン人であった。日本人へのスペイン語教育に情熱を失ってしまったとすれば、それは我々学生に責任があったと見るべきであろう。それに来日以来一度も故国の土を踏んでおられないから、戦争中はさぞ苦労されたであろう。木曜四限は体育実技。大学に入って始めて体育の楽しさを知ることができた。ある時実技評価のための三種目から成るテストがあった。三種目とは100メートル走と懸垂七回ともう一種目は何であったろうか。とにかく主題は100メートル走である。ヨーイドンで走り出して驚いたの何のって。筆者の前にだれも走っていないのである。あれよあれよという間に筆者がトップでゴールインしてしまった。よほど運動神経の鈍い連中と一緒に走ったんだろうと思うが、それでも筆者には自信になった。それからは語科対抗の野球試合にも進んで参加するようになった。今になってみると、卓球部に入部しておけばよかったと思うのだが、当時はスペイン語学科の天羽・橋本両先輩の妙技に圧倒されて入部の意欲をなくし、かつ二年生になった時、一年で入部した成田宗彦現卓球部ＯＢ会長の、当時としては珍しいシェークハンドに絶望してついに永久に入部のチャンスを逸してしまった。

金曜二限は五島茂先生の経済学。典型的な大学教授の講義。我々は無批判にノートをとるのみ。内容は恐慌についてであったと思う。実につまらない授業であった。三限は笠井鎮夫主任教授のスペイン語。ご自分で編まれた笑話集「良きユーモアの書」をテキストにお使いになった。先生には随分お世話になったけれども、先生の人生観、そして授業態度にはまったく感心しなかった。その点で学問的にご自分の考えをズバズバおっしゃったのは会田先

生だけであった。四限は乾亮一先生のハーディーの短編の講読。先生の日本語がよく分からず、実に無味乾燥な授業。筆者の不熱心な授業態度が災いしたのであろう、これまた「可」を頂戴してしまった。「可」はあとにも先にもこの一年生の時の二つだけである。幸いにして「不可」には一度もお目にかかったことはない。ヤレヤレ。

土曜日は三限の体育講義だけを履修したが、これは後半の半年だけの授業であったから、前半などはとくにクラブ活動に熱中した。卓球部への入部をあきらめた筆者は同級生の石井陽次郎君あたりに誘われて音楽部に入部した。音楽部といってもわずか10名ぐらいの部員から成るコーラス・グループに過ぎず、スペイン語学科三年生の鷹野宏先輩の指揮でシューベルトのミサ曲の中からの男性四重唱曲を徹底的にしぼられたような記憶がある。しかし高校時代に我が家のオンボロ・ラジオでＮＨＫの洋楽番組を聴くだけの、いわば受け身の音楽ファンであった筆者が、自ら積極的に音楽してみようと思い立った場合に、独奏・独唱はもちろん不可能、そして楽器を買うのも貧乏学生ゆえ絶対に駄目となったら、あとに残るは自分ののどを使ってのコーラスしかないではないか。これでも自ら音楽する楽しさを味わうことができて、とても有益であった。筆者がコーラスで得た教訓というのは、コーラスをやるには耳が良くなくてはいけない、良い耳で他人の出す音をよく聴いて自分の出す音をそれに合わせてハーモニーを形成せねばならないということで、今以上に協調性に欠けていた筆者でも少しは協調性を身につけられたのではないかと思っている。この音楽部はその後男性合唱だけでは立ちゆかなくなって、女子栄養短大の女声と一緒に混声合唱団を形成することになり、この団体は1968年大学紛争が勃発するまで続き、毎年12月に定期演奏会を開いていた。今の家内と出会ったのもこの東京外国語大学・女子栄養短期大学混声合唱団においてであるから、その意味で筆者の命の恩人のようなものである。

話を元に戻して、月曜日の筆者の時間割はというと、一限は荒井先生の、四限は宮城先生のスペイン語の授業で、週に合計七つのスペイン語の授業があったから、その点でなかなか充実していたと言えるであろう。ただし宮城

先生が盲腸炎で入院・手術されたので、夏休み前は月の四限と火の二限がブランクになってしまったのは残念なことであった。二限は八木林太郎先生の英語初級に出てみたが、何だか面白くなさそうなのでやめてしまい、空き時間にした。たまにはこういう空き時間もなかなか乙なものである。英語初級と言えば、次の三限の安藤一郎先生のハーディー講読は圧巻であった。学生を指名して読んで訳させ、そのあとご自分で訳していかれるだけであるが、何かしら大学教授らしい風格を感じさせるのである。何より良かったのはハーディーの短編をどしどし上げていく、いわゆる速読の授業で、それまでの横浜翠嵐高校でのできない連中中心の授業の正反対で、ついてこない奴はついてこないでよい、ついてくる奴だけ相手にしようという授業であったから、このおかげで筆者は英語の文章をバリバリ読むという大変良い癖がついた。最近よく東京外国語大学のみならず、各大学の英語の授業が訳読ばかりで、役に立たなくてしかもつまらないという評判を聞くが、冗談ではない、筆者に言わせれば、まずだまされたと思って訳読の授業に真面目に出て、訳読に打ち込んでごらんなさいと言いたい。真の意味で役に立つものというのは、一見したところ役に立ちそうもないものである。そういうものをだまされたと思って一所懸命やっておくと、10年ぐらいして、「ああ、あの時つまらないと思ったことをやっておいて本当に良かった」と思うのである。筆者にはずいぶんとたくさんこの種の経験がある。

月曜五限は国松久弥先生の人文地理学。大きな48番教室に筆者の他に英米語学科の女子学生二人だけなどという授業であった。それでいて試験となると、あの48番が満員になったのには呆れ返った。あの独文学の国松孝二氏の兄君で、そのご子息は日本文学の国松昭東京外国語大学教授である。当時は中央大学から出講しておられたように記憶している。

このようにして筆者の大学一年目の生活はスペイン語の勉強と英文の多読・速読とコーラス、この三つだけで大した後悔もなく終止符が打たれた。

めでたく二年生になると、スペイン語の授業は七つから六つに減った。しかも悪いことに、と申しては失礼ではあるが、ムニョース先生の授業が週2

回になった。ということはスペイン語の授業は実質四つになったということだ。まず宮城先生は一年の前半で笠井先生のスペイン語4週間を終えられ、後半はプリントでスペインの地理の訳読をしてくださった。カスティーヤ、カタルーニャ、アラゴン、…といった風に州ごとに地勢、気候、風土等が述べられているプリントであったが、西和辞典は村岡玄編のものしかなく、学生は無論のこと宮城先生すらスペインを訪れておられなかったのだからまったく地理的実感がなく大苦戦の連続であった。その宮城先生、我々が二年になると、こんどはバルセローナのアマルテーアという出版社からルイス・マソリアーガ著の「スペイン史概説」を取り寄せて訳読をしてくださったが、二年になってスペイン文に少しは慣れたとはいえ、やはり大苦戦であった。しかしこれらの大苦戦の積み重ねが今の筆者にとってどんなに役に立っているか、量り知れぬものがある。このように宮城先生が我々にスペインの地理や歴史を教えてくださったのは、学生の間から訳読や外国人教師による会話の授業だけではつまらない、もっと外国の事情講義をやってくれという要望が出、それに応えての授業であったろうと推察される。しかし失礼ながら宮城先生はスペイン地理やスペイン史の専門家ではない。結局は先生の場合訳読に戻ってしまう。学生たちが当時求めていたのは、おそらくスペイン内戦後のフランコ独裁体制がどのようなものであったのかとか、バスク地方におけるバスク語教育は許されていたのか等々のスペインの、とくに政治の現況についての講義だったのだろう。けれども当時はそういった講義はいくら学生が要望しても無理であった。これに反して現今は国際化が進んで、学生たちでさえ在学中にスペイン語圏に足跡を印するのが当然のことになってしまった。そうなれば学生たちは事情講義など求めなくなるかと思いきや、むしろ益々求め始めているのではなかろうか。現在はかつての事情講義は昇格して地域研究と名を変えているが、往々にして地域研究には基となるディシプリンが欠けることがあり、「広く、浅く」という筆者の最も忌み嫌う行き方になることが多い。筆者思うに、在来の訳読はえてしていわゆる訳読だけに終わってしまい、たとえばスペイン文化を扱った文献でエラスムスが出てきて

も、オランダの人文主義者という以上の説明はなしに終わるから不満が出てくるのだろう。テキスト中にエラスムスが出てきたら、彼はスペイン文化史の上で非常に影響力の大きかった人であるから、極端に言えば一時間半をそのためだけに費やしてもよいと思う。筆者はめったに持てないスペイン語テキストの訳読の授業ではとくに固有名詞が出てきた場合に多くの時間をかけて詮索をすることにしている。

会田・荒井両先生は、スペインの岩波文庫と呼んでもよい「アウストラル文庫」の中から、マリーア・デ・マエストゥ編の「20世紀名文集」を人数分取り寄せてくださり、会田先生は巻頭から、荒井先生は巻末からそれぞれ読んでくださった。ただしこのテキストは「20世紀名文集」と名乗ってはいるものの、事実上98年代作家のみを取り上げており、会田先生はウナムーノ、荒井先生はバローハを読んでくださった。残念ながらその年の後半は会田先生がスペイン国サラマンカにお出でになったため、授業がなく、折角購入したテキストもほんの一部分しか教室では読んでもらえなかったので、筆者は夏休みを利用して自分で辞書と格闘しながら読んでいったが、筆者がこういう職業についたからとくにそう思うのだろうけれども、こういう自学自習をしたことが有形無形のうちに大いに役立ったと思っている。

さて問題は土曜日二限の笠井先生の授業である。先生はご自身の編著による「スペイン語商業通信文」（大学書林刊）をお使いになって、日本の商社が外国貿易をおこなう際のスペイン語の手紙文を教えてくださった。先生がこういうテキストをお選びになった裏には、当時大学生の就職が大変きびしく、先生にとっては四年生の就職の問題が最大の関心事であったので、会社に入ってすぐ役立つようなスペイン語商業通信文の書き方を身につけさせておこうという、先生なりの親心があったのである。事実先生は事、学生の就職のことになると真に献身的であった。我々が四年生の秋には授業時間をつぶして、黒板に求人会社名を書き並べ、その下に各会社への就職希望者名を書いて調整をしてくださった。ありがたいことである。しかしそうは言っても二年生の6コマのスペイン語の授業は選択の自由のない必修である。中に

はスペイン文学を専門としようとしている人もいる。事実筆者の同級生である桑名一博清泉女子大学教授などはすでに入学時に、あるいは入学前からスペイン語圏文学の研究を一生の業に決めていたようだ。そこで先生は「お前は文学の方へ進むのだから俺の授業には出なくてもよい」とおっしゃったとだいぶ後になってから桑名氏に聞いた。改めて笠井先生を見直した次第である。筆者の場合はどうであったか。たしかに父親は武士の商法で会社に馴染まず、健康の上でも問題が多かったし、母親は「お父さんがヨボヨボだからお前は早く就職して給料を家に入れてくれ」と言っていたしで、筆者も三年生になったら、語学文学専修課程よりも、サラリーマン向けのコースである国際関係専修課程に進み、いずれはサラリーマンになるつもりであった。ただそれと同時に筆者には漠然とではあるが、大学のアカデミズムへのあこがれがあった。そういう筆者には会田先生のような少数の例外を除いて、東京外国語大学スペイン語学科にはまだ専門学校的色彩が色濃く残っているように映じた。このことが筆者をして自己の才能をも顧みず東外大アカデミズムに貢献しようという気を起こさせた原因の一つである。

そういう気を筆者に起こさせた二つ目の動機というのは朝鮮動乱である。1953年というとまだ動乱の真っ最中で、国連軍という名目でコロンビヤの兵士たちも第一線で戦っていた。そういう兵士たちが1週間の休暇とお小遣いとをもらって横浜へやってきていた。もちろん彼らにとっては買春休暇であるが、その他に彼らは祖国へのお土産をどっさり買い込んでくれるのであった。そこでそういう土産物店が横浜に二軒でき、そのうちの一軒の経営者が戦前に東京外国語学校のロシヤ語科を卒業した座間謹司さんという方で、スペイン語の通訳のアルバイトとして我々スペイン語学科の学生を雇ってくださった。我々の方は生きたスペイン語会話の勉強になるからということで働き始めたのだが、授業はサボらねばならず、両親に随分心配をかけてしまった。スペイン語に関係のある科目で、4年間でただ一つの「良」を頂戴してしまったのものこの二年生の時である。しかも同級生の上野哲生君と金子三千雄君とともにこのアルバイトを始めたのだが、上野・金子両君はスペイン

語の会話力で筆者に優っていた上に、仕事の能力の方でも圧倒的に筆者をリードしていた。この時筆者はうすうすとではあったが、自分はサラリーマンには向いていないのではないかと感じ始めたのであった。そして実社会というものがこんなにも醜いのかということを痛切に感じたのである。もちろん大学の内部もけっこう醜いのであるが、その醜さの程度において実社会は圧倒的に大学をリードしている。当然のことながら、一生のうち一度もサラリーマンとして実社会を経験しなかったということは、筆者の最大の劣等感を形成している。

話は前後するが、一年生の後半ぐらいから筆者は同級生に誘われた場合がほとんどだが、スペイン語のネイティヴ・スピーカーがいると聞きつけると、どこへでもとんで行って下手なスペイン語で話しかける癖がついた。引っ込み思案な筆者にしては実に珍しいことである。これはとくに受験英語によって歪曲されたためであろうが、筆者はいまだに英語のプラクティカルな力が皆無に等しい。とくにヒヤリングの能力がひどい。クリントン大統領やダイアナ妃の英語は半分も聞き取れない。ヒヤリングが悪いのにスピーキングができるはずがない。東外大に入学してスペイン語を専攻することになった時、筆者は英語で失敗したからこんどはスペイン語についてはプラクティカルな力を絶対に身につけてやろうと決心したのである。そのためにまず基本単語の意味を覚え、初等文法を完全にマスターすることに全力を注いだ。宮城先生による「スペイン語4週間」の授業は夏休み前に終わっていたと言いたいところだが、前述のとおり先生は病欠されたので、勤勉な同級生につられてではあったが、筆者も自力で「4週間」を読了したのではなかったろうか。その上でスペイン語のネイティヴ・スピーカーに体当たりをした。不思議なことに、どんなにこっけいな間違いをしてネイティヴに笑われても筆者は挫けなかった。外国語を話せるようになるには、どうやら図々しさ、あるいは不屈の精神が必要なようである。以上のような筆者の経験から生み出された、筆者なりのスペイン語の学び方を以下に紹介しておこう。

困ったことに、スペイン語のみならず、そもそも外国語の学び方には近道

というものがない。基本単語はあくまでもしっかりと覚えなければならないし、12歳を過ぎた人なら最大の嫌われ者である文法もがっちりとマスターせねばならない。基本単語を覚えるのに単語帳を作ってくそ暗記をするのは愚の骨頂である。平易なスペイン語の短編小説を辞書を引き引き覚えていくのが一番良い。会話力をつけるためには平易な短編小説の訳読――それもまず必ず声に出して文章を読むこと――が意外に役に立つのである。そういう意味でも外国語学習には近道はないのだ。一見回り道のように見えるコースをたどった方が目標に早くしかも確実に到達できるのである。「やさしいスペイン語」とか「楽しいスペイン語」といったものはありえない。外国語の学習は本来苦しいものなのである。だからこそ苦しい学習ののちにその外国語をマスターし終えた時の喜びは何物にも代えがたい。

会話というのは、相手の言うことを正しく聞き取ってそれに直ちに反応せねばならない。一種の作文である。したがって日常会話でよく用いられる章句を頭に入れておくこともちろん重要であるが、それ以上に通常の作文力にもたけていなければならない。それにはやはり初等文法をしっかりと身につけた上で、作文の学習書に挑戦することだ。ただし誤解を招かないようにここでお断りしておくが、さきほどから筆者は「文法、文法」と叫び続けているけれども、実際の会話では相手の言ったことに間髪を入れずに反応せねばならないから、そういう際にまで文法を考えている暇はない。ということは実際の会話では文法はいくら間違えてもよいということだ。こう言いながら他方では、文法はしっかりと身につけておくべきだという筆者の主張は矛盾しているだろうか。

次に聞く力。いくら話す力がついていても、相手の言っていることがチンプンカンプンでは話す力は生きてこない。とくにスペイン語の場合、息が続くかぎり語と語との間がつなげて発音されるから、まるで機関銃のようなスピードで話されるような感じがする。スペイン語民は単純なことを回りくどく話す癖があるから、実は２、３キーワードさえキャッチしてしまえば、いくら機関銃で攻めてこられても大したことはないのだ。要はスペイン語のカ

セット・テープを丹念に聞いて耳を慣らすこと。それに最近では衛星放送で毎日スペインのテレビ・ニュースが見られるようになっているとか。

最後に話す力。以上のような読む力と書く力と聞く力とがついたら、もうスペイン語圏を訪れてそこに住めば、話す力はおのずとつく。もしそれがかなわなければ、日本国内でなるべく日本語の下手なスペイン語話者を見つけて1対1でスペイン語で話し合うことである。その際決して文法的ミスを恐れてはならない。会話では基礎学力をつけた上での図々しさが必要とされるのである。

よく日本国内でスペイン語をあらかじめ勉強しなくても、現地、つまりスペイン語圏に行きさえすれば万事解決と思っている人がいる。性格の強い人ならそれでもスペイン語をマスターできるだろうが、あとで伸びがピタッと止まってしまう。性格の弱い人はノイローゼになって、下宿の部屋から一歩も外へ出られなくなってしまう。日本でスペイン語を勉強してから現地に来た人は、最終的には現地人にスペイン語で日本の文化を説明できるし、現地の文化を現地人と対等に、しかも現地人の前で堂々と論じることができるまでに至るのである。

このように筆者の将来をある程度決めてしまうような出来事がいくつも起こった1953学年度は終わり、無事第三学年に進級することができた。前述のとおり、サラリーマンになるべく国際関係専修課程に進んだ。ということは簿記会計論とか経済史とか民法とか国際経済論とか貿易論とか経済英語とか経営管理論とかの専修課目を履修するということである。この頃には筆者はすでにスペイン語にしか興味がなかったから、前掲の諸科目はいやいや聴講していたと言ってよいだろう。したがってそういう心構えは必然的に答案に現れるのだろう、「良」ばかりたくさん頂戴した。これに反し、スペイン語の授業は筆者にとって楽しいものばかりであった。会田先生のスペイン文学史、荒井先生のヒメネス・アルナウの演劇講読、宮城先生のウナムーノ講読等々。また一年生の時から、家が貧しかったせいもあるのだろう、筆者は少々マルクス・ボーイになり、この学年ではロシヤ語を石山正三先生に習ったり

した。今となってみると、ロシヤ文字が読め、かつ書けるのは大変なプラスになった。若い時には一見無駄と思えることをしておくものである。マルクスといえば、大学一年の時に翠嵐高時代の親友と一緒に資本論を読んで、たしか第七巻まで行ったと思うが、分かったという感じは全然しなかった。マルクス・ボーイとしての実践の方もお粗末なもので、破壊活動防止法案反対の署名運動を巣鴨駅前でおこなったくらいのものである。それも通行人から「なぜ法案に反対なのだ」と訊ねられてシドロモドロになり、、同僚の助けを借りる始末であった。あれから43年を経て同法をオウム真理教の信者たちに適用しようとする動きが出るなどとは夢にも思わなかった。

三年生の夏休みはスペイン語の勉強もやったと同時に山登りの楽しさを覚えた。コーラス・クラブの合宿で霧ケ峰へ行ったのが病みつきになるスタート台になり、そのあと奥日光でキャンプをやったり、尾瀬沼を歩いたりした。尾瀬では燧岳に登ったが、霧ケ峰では蓼科山に登りそこない、奥日光でも白根山を見上げていながら登らなかった。もったいないことをしたものである。これですっかり登山の味をしめた筆者は卒業をひかえた四年生の夏休みに北アルプス槍ケ岳に登ったり、会津磐梯山を訪れたりした。これではいい卒業論文は書けるはずがない。

話が山登りから筆者が四年生の夏休みに進んでしまったので、スペイン語とコーラスと登山に終わった第三学年第四学年の話に移ろう。筆者のスペイン語熱は止まるところを知らず、国際関係専修課程を選んだにも関わらず、唯一のスペイン語のゼミナールである会田ゼミに入ることをついに決心した。ということはスペイン文学で卒業論文を書くということである。当然のことながら、会田先生はいやな顔をなさった。なにせ先生は我々と一緒に入ってきた女子学生３名に対し、「ここは女の来るところではない、商人になりたい奴の来るところだ」とおっしゃって彼女らを追っ払ってしまわれた方である。先生のおっしゃる「商人になりたい奴」が選ぶコースである国際専修課程に所属している筆者が歓迎されるはずがない。今になってみると、どうして筆者はあんなに押しが強かったのか自分でも分からない。これを醜男の深

情けというのだろう。とにかく先生は渋々ながら承知してくださった。ところが筆者の図々しさはこれで終わったわけではない。卒論のテーマまで先生に選んでいただいた。この時はすっかりあきらめ切っておられた先生は、図書館の中の普段なら学生が絶対に入れない部屋へ筆者を連れて行って、ペレス・ガルドスの「ドーニャ・ペルフェクタ」その他の書物をご自分の名前で借りてくださり、筆者に貸与された。かくて「ペレス・ガルドスの初期の三小説」というのが筆者の卒業論文のテーマとなった。しかしこれほどまでの会田先生のご好意に報いるような卒論を書いたかというと、お世辞にもそうは言えない。先生に実に申訳ないことをしたと思っている。これで筆者はスペイン文学専攻をあきらめ、スペイン語学に転向したのである。ただただお恥ずかしいの一語に尽きる。

さて北アルプス登山を敢行もした四年生の夏休み、卒論も書きながら筆者は卒業後の進路を真剣に考えた。前述のとおり、一旦は就職せざるをえないと決心したにも関わらず、法律・経済にはまったく興味を覚えず、ただひたすらスペイン語に愛着を抱くのみであった。しかもコロンビヤ兵士のためのアルバイトをして世の中の醜さをいやと言うほど知り、その上自分がサラリーマン向きでないことも悟ってしまった。となると、できたら大学に残って我が愛するスペイン語に関係のある研究に従事して一生を過ごせたら一番いいなという結論になってしまった。そこで恐る恐る父親に筆者の意向を打明けると、家庭の事情で全然自分のやりたいことのできなかった父親はせめて息子にはやりたいことをやらせてやろうと思ったのだろう、身体がボロボロになっていたにも関わらず、「お前は好きなことをやれ」と言ってくれた。ありがたいことである。「お父さんがヨボヨボだから、早く就職して給料を家に入れてくれ」と言った母親とは大違いである。そこで会田先生に自分の志望を長文の手紙に綴った。先生からはお返事をいただけなかったものの、夏休みが終わる頃になって大学から「笠井教授が面接するから〇月〇日〇時に出頭せよ」という通知が来た。何も知らずに、定められた時刻に出頭してみると、笠井、会田、荒井、宮城の4先生が坐っておられたが、発言なさるの

は笠井先生お一人だけ。いやはや叱られたの何のって。そのお怒りは大変なものだった。要するに、スペイン語学科の四年生の就職はご自分が全責任をもって面倒をみるという意気に燃えておられた先生は、たとえ卒論の指導教官であろうと、会田先生に筆者が意思表示したことで裏切られたようにお感じになったのであろう。当方はひたすら平謝りに謝った。もっとも後に荒井先生は「原が会田さんに話を持って行ったのはゼミの指導教官だから当然だ」と筆者の行動を弁護してくださった。あとで知ったのだが、この時筆者のほかに四人の同級生が呼ばれて卒業後の進路を聞かれたらしい。そのうち二人は初めから就職希望、あとの二人は大学に残ることに色気を示したらしいが、どういう経緯で筆者が残ることになったのか定かではない。笠井先生には「お前が五人の中では一番成績が悪い」とずけずけ言われ、しかも先生をあれほどまでに怒らせてしまったのだから、一時はすっかりあきらめていたのだが…。それから何日か経って荒井先生の筆跡で「貴君を副手として推薦することに一応内定した」旨のお手紙をいただいた。今から40年前のこの手紙、9月2日の消印が押されている。一度はあきらめていただけに、この手紙を開封して文面に接した時には天にも昇る心地がした。と同時に自分の責任をひしひしと感じた。あれから40年あの時ひしひしと感じた責任を筆者は果たしたのであろうか。これは筆者が判断することではない。笠井先生を激怒させたことから筆者が得た教訓は「自分がある言動をとることによって、それを他人がどう捉えるかについてはよほど慎重に予め考えねばならない」ということである。思えば筆者は今までに数多くの失敗を重ねてきた。失敗を後にプラスに転じるように努めればそれでよいのではなかろうか。我々の卒業式の日に会田先生が我々におっしゃった「諸君、失敗をしなさい」というお言葉はまさに名言であると思う。かくて筆者は何の悔いもなく大学生活4年間を終えることになった。

二. 副手時代

1956年5月から筆者は副手に採用され、当時の岩崎学長から、「1時間30

円を給する」旨の辞令をいただいた。ただしどんなに働いても月給は3000円を越えないことになっていた。主たる仕事はタイプライターを叩いて先生方の教材を作ることにあったが、その他お茶汲みも喜々としてやったものである。しかし当時の副手が現今の教務補佐と唯一違うところは、副手には研究をする義務があったのに対し、後者にはそれがないということである。笠井先生は筆者に「中南米のスペイン語」という絶好のテーマをくださった。このテーマについての筆者の研究は合計14編の論文を生み、それらが一冊にまとまって、原　誠. 1995. 中南米のスペイン語. 東京. 近代文芸社. として出版された。これで少しは笠井先生のご期待に応えられたかしら。

ここで非常に面白い話がある。日本の敗戦からすでに10年以上経っていたというのに、筆者は東京外国語大学を卒業した直後の1956年４月、駒沢大学のスペイン語の講師になることができた。これひとえに大学一年の時に「可」を頂戴した増谷文雄先生のおかげである。駒沢大学のとある高僧が曹洞宗布教のためブラジルにお出掛けになった。そこで実際はポルトガル語が話されているブラジルにもっと曹洞宗を広めるためには駒沢大学にもスペイン語の講座を置かねばならないとお考えになり、帰国後仏教学者としても著名であった東外大の増谷先生に紹介を依頼されたのである。この時はラテン語の講座も新設するということで、同科目を担当する英米語学科の一年先輩の元持（現姓中村）恭子氏とともに、増谷先生に連れられて駒沢大学に行き、衛藤即応総長と山田霊林学監に紹介された。山田学監は筆者の父親がよく存じ上げている方だったので、筆者はその点でも幸運であった。ところでこの拙文をお読みの方々は大学を出たばかりの青二才が、大学院へも行くことなしに、いきなり大学でスペイン語が教えられるはずがないとお考えであろう。しかし自慢ではないが、筆者は高校生の時から、家庭教師ではなしに、英語の教授体験があるのである。それは横浜翠嵐高校の頃、横浜第一高女の間借りからもとの焼跡に急造された木造バラックに戻ってきたら、これこそ泣き面に蜂と言うのだろう、英語担当の先生が比較的長期間休んでしまわれた。学校側からろくに説明もないまま、相当長く自習時間が続いたところ、これは本

当に驚いたのだが、比較的勉強の好きでない、いわゆるゴツい連中から、「原と黒川、お前ら教師に代わって英語の授業をやれ」という声が上がった。引っ込み思案の筆者がこの時はなぜだか「任せておけ」とばかりに黒川君と予め教案を作って授業（？）をやった。最後にはこのニュースを聞きつけた教師がやってきて、後で聴いていた。今となっては懐かしい思い出である。その次の教授体験は大学四年の時の教育実習である。笠井先生はつねづね「君たちはいつ失職して路頭に迷うかもしれないから、教職課程はとっておく方がいい」と言っておられた。そのアドヴァイスを尊重して、筆者は中・高校の英語の教師の免許を取得したが、それには必ず教育実習を体験せねばならなかった。その頃は今と違って教育実習先は簡単に見つかった。筆者は東外大と向かい合っている武蔵野高校で実習をやらせていただいたが、あがってしまってシドロモドロになることもなく、女高生たちを相手に楽しく授業をやらせてもらった。そういうわけで、英語とスペイン語との違いはあったものの、駒沢大学でスペイン語を教え始めてもまったく動揺することはなかった。しかしこの二年間のスペイン語教授経験は、1958年東外大で助手になって、新入生にスペイン語を教え始めた時に大いに役立ったことはたしかである。この頃から今まで一貫して変わらない筆者の授業方針は、学生が比較的少人数であったおかげであるが、必ず全員を少なくとも１回は指名するということにある。こうすれば学生の出欠をとる必要はないし、学生側からすれば、代返ができない。また筆者は学生一人ひとりのスペイン語の発音を矯正せねばならないので、教壇で突っ立ち放しというわけにはいかず、最後列まで出張して学生の口のそばで彼（女）の発音を聴くことにしている。そうするとあがってしまって普段はできる発音ができなくなってしまう学生がいると、少し離れてやったりする。とにかく学生一人ひとりとのスキンシップを保とうというのが筆者の根本方針である。したがってＬＬも使ってみたが、教師である筆者と学生との間に機械が入ってしまうと、学生との直接交渉が妨げられ、数年でやめてしまった。同様にＣＡＩにも筆者は多大の疑問を抱いているのだが、これについては稿を改めて書くことにする。

さて副手時代の筆者の研究についてであるが、もちろん中南米のスペイン語の研究もおこなったが、会田先生のお勧めもあって、佐々木達先生の英語学の授業、鈴木健郎先生のフランス文学の授業、家島光一郎先生のフランス語学の授業等を聴講させていただき、多大の刺激を受けた。とくに佐々木先生のおかげで筆者は一生の言語学的方向を決めることができたと言っても過言ではない。またそういう授業に出るようお進めくださった会田先生の炯眼にはほとほと敬服の他はない。また言語学の徳永康元先生のお勧めもあって、トルベツコイの「音韻論の原理」もフランス語に悪戦苦闘しながら読んだ。とにかく筆者はスペイン語の教師だからということでスペイン語の殻の中に閉じこもることなく、言語学や英語学をかじることによって視野を広げることができ、本当によかったと思う。しかし筆者の研究面については、原　誠. 1995. 我がスペイン語音研究を振り返って. 「白鷗大学論集」10―2. その他で詳述するのでここではこのくらいにしておく。

本章の最後に、筆者の副手時代のアルバイトについて触れておく。ちょうどこの頃は神武景気の始まりの時期で、中南米へ進出しようとする企業が輩出し、社員にスペイン語教育をほどこそうとする企業が続出した。筆者が笠井先生のお世話で教えに行った会社として、日本鋼業、日立製作所戸塚工場、ジェトロ等があり、けっこう謝礼は多かったから、東外大の給料こそ安かったが、筆者の総収入は同期に卒業した人々のそれより多かったと思う。この収入を貯金しておいたので、1962年のスペイン留学および英・米旅行の費用が捻出できたのである。その頃の文部省はまだ我々文部教官の海外出張旅費を負担してくれるほど裕福ではなかったのである。

三. 助手時代

1958年3月の笠井先生の定年ご退官と入れ替わりに、筆者がその空きポストを埋める栄に浴した。すなわち文部教官・東京外国語大学助手に採用されたのである。当時の筆者の給与は5等級2号俸といって、本俸が10800円、暫定手当が2240円で、計13040円であった。今の一万円の出のなさに比べて、

この頃の一万円は本当に使い出があった。筆者はこんなに沢山いただけるのかと感動したものである。しかも両親と同居で、住居費はかからなかったから、本代に多大の金額を割くことができた。その頃神田駿河台の三省堂書店で買い求めたアメリカ構造言語学関係の多数の洋書が現在の筆者の貴重な知的財産となっている。もちろんかつての母親の要請どおり、家計を助けるべく50000円ぐらいは拠出していたのではないであろうか。他方水谷清という大先輩の要請で、この年から青山学院大学の二部に出講し始めた。火曜と金曜の夜である。火曜日の方は文学部で、女子学生も多く、とにかく真面目な学生で非常に教え易かった。しかし金曜の夜、とくに20時から21時30分までの二限の学生の出来が悪く、筆者にしては珍しく講師控室を出て教室に行くのがとてもいやであった。思うに一部の入試に失敗した連中が半ばやけ気味に二部に在籍していたのではなかろうか。筆者が教室へ行くのに足が重たいというのはよほどのことである。ある時筆者の某恩師から「原君はよくもまあそんなにいそいそと教室へ行けるねえ」と皮肉を言われたことがある。普通は筆者はこういう態度で授業に臨むのである。その根底には「学生はどんなに出来が悪く、やる気のない者でも、不思議なことに、この教師は自分たちに対してやる気があるかどうか、我々に愛情を抱いているか否かをすぐに独特の勘で見抜く」という筆者の信念があるからである。決して授業に手抜きをしてはいけない。したがって夏季休暇の直前直後を休講にする、いわゆるズル休みもやったことがないし、定められた時刻に教室に行き、定められた時刻まで授業をやることにしている。

肝心要の東外大の授業の方に話を移そう。東外大は今でもそうであるが、他の国立大学と違って助手に週３コマの授業を持たせている。しかもよほどのことがない限り、助手は講師、助教授、教授と昇任できるシステムになっている。筆者などはこのように地位が安定していたおかげで、安心して130点の研究論文を書くことができた。最近大学教員の任期制がかしましくなってきたが、これを議論する際に筆者のようなまれなケースも考慮に入れてもらいたいものだ。前章で少し述べたように、筆者には以前からの教授体験が

あったために、東外大での初授業の時もまったくもたつくことはなかった。新入生60名をA、Bの二組に分けて週各1回、計2コマの授業と、他の語学科の学生で、第2あるいは第3外国語としてスペイン語を履修する人々のうち初級修了者のための上級クラス、以上3コマが筆者の担当であった。スペイン語学科の新入生のためには、会田先生の影響もあって、いきなりプリントでスペイン文を読む授業をおこなったが、その際文法の説明は逐一板書による説明では煩わしいので、宮城昇先生の「基礎スペイン語文法」（白水社刊）を学生に買ってもらって、随時該当ページを参照させるようにした。あの頃の学生にはそういう教授法が充分通用したのであるが、現今の学生にはこれでは絶対駄目である。つまり時代は「1を聞いて10を知る」から「10を教えても8しかおぼえてくれない」へと移行したのである。なお筆者は4月の最初の授業は丸々1時間半を、スペイン語とはどんな言語かとか、スペイン語をどういう態度で学ぶべきかといった大きなテーマについて自分の考えを述べることに費やしている。これまた40年間の筆者の一貫した方針である。また一般語学の上級の授業では、それが上級であるがゆえに、最初から気楽にスペイン語のテキストを読んだ。たしか初年度はマダリヤーガのスペイン史の一部を笠井先生が訳注をおつけになって大学書林からお出しになった教科書を読んだと思う。今の学生はとうてい駄目だが、あの頃の学生は筆者に充分ついてきてくれた。「峠」と訳すべき単語を「港」と誤訳して学生から注意されたという実に恥ずかしい思い出もある。

大体このようにして助手としての筆者の四年間は過ぎていったのだが、1960年筆者の助手としての3年目に大変な事件が起こった。安保騒動である。日米安全保障条約それ自体に反対でしかも岸内閣のやり方に怒り心頭に発した我々教師は何遍も国会にデモをかけ、その勢いをかって銀座通りでフランス・デモをおこなったりした。デモが解散してから会田先生や荒井先生たちと飲んだビールのおいしかったことといったら。この頃から筆者は酒の味をおぼえたらしい。会田先生は本当によくお酒を召し上がった。そして酔っ払って新宿のさるバーにお出でになってはお気に入りのホステスを抱きかかえな

がら、傍らの筆者に向かって、「原、いいか、あんな奴がやっているんだったら、このおれがやってやるという気概を持て」とよくおっしゃった。先生はそれほど永田寛定先生訳の「ドン・キホーテ」への反感が強かった。しかし酔いが覚めてからよくよく考えてみると、先生のおっしゃったことは学問の基本なのであった。学問とは一切の既成の権威に反撥することから進歩するものなのである。神様を作ってしまうのが一番いけない。かくて会田先生は筆者にお酒も教えてくださったが、学問の根本をも教えてくださった。そして先生の「ドン・キホーテ」の訳が出るたびに、筆者に献辞つきでくださり、その献辞にはほとんどつねに「俺を追い越せ」と書かれてあった。その通り、弟子は師を学問的に追い抜く義務がある。筆者は果たして先生を学問的に追い越せたのであろうか。

四. 講師時代

1962年4月、7月からのスペイン留学を前にして筆者は助手から講師に昇任した。7月の出発までは一、二年生の基礎的な授業を担当したが、二年には寺崎英樹現東外大教授、一年には清水透現フェリス女子大教授が在籍していた。スペイン留学のためにはまず在日スペイン国大使館の留学生試験を受けなければならなかった。もっとも試験官が会田先生とモンテシーノス一等書記官の二人であったから合格は疑いなかったが、もう一人の受験生が、スペイン人並、あるいはそれ以上にペラペラの小林一宏現上智大教授であったから、スペイン語をボソボソとしかしゃべれない筆者は大いに恥ずかしい思いをした。それはともかく7月4日に日本を出発し、パリで五泊して市内見物をしたあと、9日にマドリードに到着、何とか一色忠良元神戸市外語大教授の下宿先に落ち着いた。折良くそこに角田理三郎元大阪外大教授も止宿しておられ、「原さん、ここは二年間で簡単にドクターが取れるそうですよ」などとおっしゃるものだから、日本を出発する時は全然そんな気はなかったのだが、日本で大学院へ進学しなかった劣等感がはたらいたのだろう、どうせ暇なのだから、ひとつドクター取得に挑戦してみようかという気を起こし

てしまった。しかし10月のマドリード・コンプルテンセ大学の授業開始までは時間があるということで、まずスペインに慣れるために、あるサマー・コースに出たが、まるで子供扱いされ、しかも西作文でフランス人たちに圧倒的なリードを許し、むしろ自信を失ったような形になったが、このコースの二人の先生にはのちに大変お世話になることになった。どういうものかお二人とも反フランコ派であった。サマー・コースの最後の修学旅行は五つのコースのうちの一つを選択するのであったが、日本にいる時にムニョース先生のご意見をうかがったところ、先生は即座にカスティーヤ・アラゴンコースを推薦してくださった。のちにスペインほとんど全土を旅行したが、バレンシヤ出身のムニョース先生が同コースを推薦してくださった炯眼には無条件で頭が下がった。サマー・コースのあと、8月末から9月にかけて、アメリカとイギリスを旅行した。前者では第9回世界言語学者会議に出て、チョムスキーの講演を聴き、後者ではオックスフォードでの第1回世界ヒスパニスト会議に出て、メネンデス・ピダルの講演を聴いた。しかしとにかく英語が分からないし、しゃべれないしで、ほうほうの態でスペインへ戻ってきたが、その時は本当に我が家に帰ったような気がした。英米旅行に出掛ける前に住んでいた素人下宿の部屋にはヘスス・ガルシーア・デル・リーオという理学部物理学科の学生が筆者を待っていた。この男が実にいい奴で、この男と同室でなかったら、おそらく筆者のドクター論文は完成しなかったのではなかろうか。スペイン人には珍しく他人のプラヴァシーを尊重する紳士であった。彼と同じ部屋で過ごしたあの二年間、あれはおそらく我が人生での最高の二年間ではなかったろうか。とにかく一度も日本に帰りたいと思ったことがなく、また一度も日本食を食べたいと思ったことがない。在スペインの日本大使館は通訳やガイドのアルバイトをいろいろと世話をしてくださったし、関守三郎大使にはスペイン語をお教えしていた関係で実によくしていただいたし、近藤四郎参事官のご自宅ではよく麻雀の相手をさせられたし、当時外交官補の塚田千裕氏（現ブラジル大使）とはよく一緒に遊んでいただいたし、外務省研修所でスペイン語をお教えした寺田輝介氏（現メキシコ大使）や国

安正昭氏（現ポルトガル大使）にもバヤドリーやサラマンカで楽しい思い出をたくさん作っていただいた。アルバイトのおかげで、本もたくさん買えたし、ほとんどスペイン全土を旅行することができた。とにかくあの二年間については、あの時ああすればよかったといった後悔が何一つないのである。これはひとえに当時のスペイン人たちの善良な性格のなせる業ではなかったろうか。筆者はすっかりスペインびいきになってしまった。右翼に刺されることを覚悟の上で言えば、筆者は我が祖国日本よりスペインの方がずっと好きである。スペイン語の教師なのだから、こういう偏向は許されると思うのだが、駄目だろうか。

このようにして後髪を引かれる思いで、1964年８月にスペインから帰国した。東京オリンピックの直前である。待ってましたとばかり、スペイン語史を週２回、いずれも一時限目で担当させられたのには参った。牛島信明現東外大教授が在学していた二年生にはスペインの地理の授業をおこなった。翌65年１月に結婚、同４月には助教授に昇任した。

五．助教授時代

筆者が助教授であった10年間で最も際立った出来事は二つ、外国語学研究科大学院が発足したことと、大学紛争とであろう。前述の佐々木達先生等のご尽力によって1966年東外大に大学院が発足、恩師の宮城先生を差し置いて筆者が「スペイン語学研究」を担当することになった。このニュースを聞きつけた笠井名誉教授は筆者の研究室に電話をかけて来られて、「宮城君や君にはまだ大学院を担当する資格はない」と大層なご立腹であった。筆者はこういう考えには反対である。そうではなくて、「東外大の教師どもよ、大学院を作ってやるからもっともっと研究に励めよ」という天の声だと思えばよいのである。初めの頃は筆者は大学院の授業でスペイン語通時音韻論関係の文献を読んでいたが、一年間の授業が終わると、それが研究論文にまとまるといった具合で、院生たちよりも筆者にとって大学院の授業は実にありがたかった。この授業も三年目を迎えた頃から、当時大流行の変形生成文理論を

スペイン語の小説に適用してみようという気を起こした。ところがこれをいざ実行に移してみると、筆者がやったからかもしれないが、変形生成文法理論は実際のスペイン文にうまく当て嵌まらないのである。つまり同理論が筆者にとって反面教師の役割を果たしてくれて、筆者は大学院の授業を通じて、徐々に筆者独自の創出文法理論を考え出していったのである。その意味でも筆者は大学院の授業に対して足を向けて寝ることはできないのである。しかも我々教師をおそらくは反面教師としてであろう、優秀な若いスペイン語学・スペイン語圏文学の研究者が輩出したという点でも大学院は大きな貢献をしたと言うことができよう。

大学院が東外大の発展に大いに貢献したのに対し、1968年に起こった大学紛争は筆者の考えでは大いにマイナスに作用したようだ。ごく簡単に言えば、国会に議員を送り込んで、いわば話し合いによって日本を変えていこうとする代々木系の学生に学友会を握らせていたのでは生ぬるいとし、暴力的に変革をしていこうとする反代々木系の起こした反乱であった。その特徴は大学を国家権力そのものに見立て、そこで教えている教師をも国家権力の走狗とみなすところにあった。したがって暴力的に大学の建物を乗っ取って占拠するし、授業は「粉砕」するし、教師に対してはこれしか正しい考えはないとして自分たちの考えを無理やり押しつけ、その考えに賛成しない教師を徹底的に吊るし上げた。悪いことに、彼らの考えを支持するいわゆる造反教師が多数出たために紛争の収束には時間がかかってしまった。筆者は1968年８月下旬から翌年３月までユネスコのコンサルタントとしてメキシコの大学院大学「エル・コレヒオ・デ・メヒコ」に赴き、スペイン語を母語とする人々のための日本語の文法マニュアルの作成に従事したので、68年９月に始まった東外大の紛争を半年だけ免れた。しかし帰国すると、半年分まとめて攻撃の対象にされたので、「半年分儲けた」という感じはしなかった。しかも悪いことに、そういう暴力学生たちの当面の最大の敵であった、大学を教師と学生との民主的話し合いによって良くしていこうとするクラス連合を筆者は支持したので、余計に彼らの攻撃も厳しかったが、筆者は彼らに対して一切甘

い顔をせず、正しいと思ったことをズバズバロに出したので、逆に彼らから評価されたということもあった。しかし筆者にとって最も痛かったのは、東外大の授業が丸１年間できなかったことと、筆者の飲み友達兼ジャン友を多数失ったことである。彼らは筆者がメキシコから帰ってきた時には、皆造反教官になっていた。こうして大学紛争は東外大に大きな傷痕を残したのである。

ところでメキシコでの日本語マニュアル作りであるが、今思い出しても恥ずかしい思いで一杯である。いくらスペイン語に堪能であっても、いくら日本語が母語であるといっても、それだけで日本語の学習書が書けると思ったら大間違いである。ましてやわずか半年間では。そこで一計を案じて、当時の小川芳男東外大学長と筆者の言語学の師である佐藤純一氏の共著になる「日本語４週間」（大学書林刊）をスペイン語に直すことにした。同書の説明は英語で書かれているから、文法事項の説明については英語をスペイン語に直すだけでお茶を濁した。ただし発音の部分は、学習者の母語がスペイン語であることを考慮して、相当程度の改変をほどこした。これ以後筆者は日増しに日本語の怖さを知るようになり、すっかり日本語から離れてしまった。なおメキシコについては、「先生、先生」と呼ばれていたがために、そしてスペイン語の話せない家族を同伴していたがために、メキシコ民衆の真っ只中に入ることができず、知墨家面だけは絶対にしないようにしている。

紛争が下火になりかけた1970年になると、当時ＮＨＫのラジオ・スペイン語講座を担当しておられた荒井正道先生が「原君、君は独自のスペイン語教授法を持っているようだから、それを世に問うてごらんなさい」とおっしゃって、同講座の講師を筆者に譲ってくださった。実は筆者は在来のありとあらゆるスペイン語の初級教科書に倦き足らず、自分自身の教科書を作る必要に迫られていた。そこで1967年から東外大の一年生にプリントの形で教材を配布して授業をおこない、将来の教科書出版のための敷石としていた。愚かな筆者は荒井先生のお言葉を真に受けて、このプリントの内容に則したテキストを作ってＮＨＫの電波を通じてそれこそ世に問うたのであったが、やはり

ＮＨＫの教養番組としての性格に合わず、７年間頑張ったがついに瓜谷良平氏に後を託すことになった。大学の教師の任務は、管理・運営、教育、研究、啓蒙の四つがあるようだが、筆者の場合は教育と研究には熱心だが、あとの二つには関心が湧かない。しかしこれがきっかけとなって啓蒙の方にも足を突っ込み始めたことだけはたしかである。

ここで大学紛争以後の学生の気質の変化について触れておこう。紛争以前は教室でいい意味で教師に食ってかかってくる学生がいたものだが、紛争以後はそういう頼もしい学生は一人もいなくなってしまった。当時のジャーナリズムは彼らのことを「しらけの世代」と呼んでいた。とにかく減法おとなしいのである。そして小・中・高で身につけた学習の方法をそのまま大学に持ち込もうとするのである。ということは教室で教師が10のことを教えねばならないとすれば、彼らは10教えることを要求するということだ。ある人は13教えろと要求すると言った。教師が口で「大学というところは学生が自ら勉強し、考える所だ。教師は学生のエンジンを始動させるだけだ」といくら言っても駄目なのである。そのうちに1973年入学者からスペイン語学科の男女比率が逆転したため、あまり良くない意味で真面目な女子学生の数が増え、この傾向は加速されることとなった。筆者などは女子学生の増加に慌てふためいてどう彼女らに対応してよいかわからず、そういった関係の書物を大急ぎで買い込んで読みふけったものである。しかし結果的には学生の性の区別を意識することなく彼らに接するのがよいということになった。世間の一部には大学への女子学生の増加を歓迎しない向きもあるようだが、筆者はこれには賛同しがたい。もしある女性がかりに大学を卒業してすぐに結婚（そのこと自体に筆者は反対であるが）したとしても、もし大学が自分の力でものが考えられ、大局をグローバルに把握できるような人間を養成する機関であるとするならば、とくに育児の面で何らかの形で違うものがあるはずだからである。筆者はこれまでスペイン語の同時通訳ができるようにと学生たちにスペイン語を教えてきたつもりはない。彼らが大学で何かを得て卒業していってくれればそれでよいと思っている。その「何か」を具体的に言うと、自分

でものが考えられる力、批判力、立派な日本語の文章を書く力等である。話を元に戻して、学生の学習態度が変わったのと平行して、大学のレジャーランド化も進んでいったように思う。ある年の外語祭でスペイン語学科の学生たちが、あの有名なミュージカル「エビータ」を見事に上演した時、筆者は感心すると同時に、絶望もした。これを要するに、世の中が良くなって就職の心配もなく、従って石にかじりついてもスペイン語をマスターせねばならないという必要性もない。となると大学に入っても学業は適当にお茶を濁して、クラブ活動等の課外活動に主力をそそぐというのも考えてみれば当然のことなのだ。就職をして会社でこき使われるのが嫌なばっかりに、親の迷惑をも顧みず留年に留年を重ねる。また親の方も渋々であろうが五年以上子供の授業料を払ってやる財力ができてしまったのである。小学生ではあったがあの忌まわしい戦争を味わった筆者としては大いなる皮肉をこめて「いい世の中になったものだ」と言わざるをえない。

このように世の中は良くなったのだろうが、この頃の筆者には不幸な事が重なった。まず1973年には、自分がヨボヨボになっていながら「お前の好きなことをやれ」と言ってくれた父親がだれにも見取られずに他界した。次いで1974年には筆者が東大医科研付属病院で胆石症の手術を受けた。ボルドーでのイスパニスタ国際学会への出席の費用を文部省が出してくれたにも関わらずである。この大病の原因は30歳台の10年間の運動不足にあると反省した筆者はそれ以後毎日ランニングをすることにした。しかし後頭部に鈍痛を覚え、血圧も173と103にもなったので食事に極端な減塩療法を採用した。すなわち刺身に醤油をつけず、天ぷらに天つゆをつけず、冷奴には酢をかけるという徹底の仕方である。この努力が実を結んで、現在筆者の血圧は上が138、下が78くらいである。食事に気をつけ、適度な運動をしたおかげで62歳の現在人間ドックに入ってもどこにも故障が見当たらない。ただし人間ドックは筆者の脳の衰えだけは検査できない。

六．教授に昇任

助教授を10年務めた結果筆者は教授に昇任することができた。この頃になると、「スペイン語学概論」を永らく担当したおかげであろうか、段々とスペイン語学の全体が何とか見渡せるようになった。またロマンス語学にも視野を広げ、一般言語学にも偉そうに口を出すようになった。このように学問的視野が広いということは教授としての責任を果たす上で重要なことであると考える。早い話が、学部学生の卒業論文の指導、大学院生の修士論文のアドヴァイスがずっと容易になった。またこのころから筆者の発表する研究論文には「言語には整然とした構造を有する部分ももちろんあるが、他方では割り切れない周辺的部分もある」ことを強調するものが目立つようになった。

この頃の画期的なでき事といえば、何と言っても1977年の東京スペイン語学研究会の発足であろう。この会はそれより一年ほど前に発足した関西スペイン語学談話会に刺激されて成立したものであったが、発足当時から五年後に迫った宮城昇先生の定年退官を記念する論文集を出版すべく、会員は毎月2000円ずつ貯金するかたわら、月例会で口頭発表したペイパーの中から最良のものを同論文集に載せることにした。論文集は総経費200万円で出来あがり、1982年２月の渋谷東武ホテルにおける宮城先生の定年退官記念パーティーで先生に献呈することができた。東京プレスの依田社長には大変よくしていただいた。おそらく利潤はゼロに近かったのではなかろうか。

1978年４月からは卓球部員でもあった女子学生二人が筆者の卒論ゼミに入ってきた。ゼミの合間に、筆者の決して嫌いではないところの卓球のことがよく話題になった。そのうち「先生、正規の練習が終わったあと球を打ちに来ませんか」ということになり、胆石症の手術のおかげで運動の必要性を痛感していた筆者は渡りに船とばかりに、自分の下手なことには目をつぶって頻繁に練習場に顔を出すようになった。そうこうするうちに秋の卓球部役員交代の時期になり、辞書作りに専心することになったという理由で辞意を表明された松田徳一郎氏に代わって筆者が女子卓球部長をお引受けすることになった。お引受けするに当たって、卓球部ＯＢの山本洵一氏に部長の任務は何か

とうかがってみたところ、①全部員の顔と名前を一致させること、②練習になるべく顔を出すこと、③公式の対外試合には3回に2回は顔を出すこと、というお答えが返ってきた。自分ではこの3条件は守れたと思っているが、人間はとかく自分に対して甘くなりがちである。17年間部長を務めた今、振り返ってみると、やはり自分として一番むずかしかったのは②である。初めはショートが10回続かなかったが、それでもあきらめずに練習に出ていっているうちに何だか初歩的な練習だったら現役部員の練習相手が務まるようになってきた。そこで4年目のシーズンを迎えた時、自ら当時の高橋（現姓福田）キャプテンに申出て、自分の練習は遠慮して部員の練習相手だけを務めることにした。一部のＯＢから見ればこれは身の程知らずもいいところだったであろう。これについては筆者のとった態度が正しかったかどうかいまだに自信がない。またこれは実は筆者にとってどうでもよいことであるが、試合をやっても実にぶざまな負け方をする。筆者が勝てるのはスマッシュのないカットマン相手の時だけであった。それは現役部員の練習相手を努めて、2球目、4球目、6球目と受身の卓球をしているからである。しかし何だかだ言っても、40歳過ぎから62歳の今日までずっと健康を維持できたのは東外大卓球部のおかげであり、それだけで大いに感謝せねばならないと思っている。その上にこういった適度の運動をすることによって、筆者の悪い頭脳も少しは冴えるのであろう、研究論文のためのインスピレーションが随分と湧いたように思う。そしてそれまで筆者にとってスポーツは見るものでしかなかったのに、自らスポーツに親しむことによってスポーツマンシップというものがいかに貴いものであるかを知ることができた。1994年と同95年の夏は猛暑であったと言われている。ところが筆者には猛暑であったという実感がない。なぜならば、周知のように、卓球の球は軽いから風が大敵である。従って夏でも窓を閉め切って競技をおこなう。また卓球台に当たる光は太陽光線のように動いていては困る。一定でなければならない。従って夏でも閉め切った窓に暗幕を引いて電燈をつけてプレイをする。この暑い練習に耐えられたら、どんなに暑くても平気である。このことから筆者が得た教訓は、暑いと

思ったらそれ以上に暑い思いをせよということである。おかげで二夏続けてクーラーとは無縁であった。とにかく卓球は筆者にとっていいことずくめであった。これからも近所のおばさん連相手に卓球を続けていく心算である。

1993年の冬、ロシヤ東欧語学科の亀山郁夫教官が1年間ロシヤへ研究留学することになり、臨時ではあるが、東外大管弦楽団の顧問のお鉢が筆者に回ってきた。臨時顧問になってみて、驚いたのなんのって、100人になんなんとする団員たちが内輪揉め一つせず、一致団結して難曲を見事に演奏するのである。1994年春の定期演奏会のメインはマーラーのタイタン、同年秋はブラームスの4番、1995年春がベルリオーズの幻想交響曲、同年秋がヒンデミットの交響曲「画家マチス」とベートーヴェンの運命といったプログラムであったが、学生オーケストラでこれだけの演奏ができれば文句なしである。もちろん指揮者の上野正博氏も実に優秀であったし、トレーナーの先生方にも感心した。その上団員たちの礼儀正しいのにもびっくりした。部員の少ない卓球部とは雲泥の差である。河口湖畔での春合宿と苗場山での夏合宿にも二度ずつ参加させてもらったが、実に楽しい思いをさせてもらった。スコアを買い込んでおいて、打楽器の後か脇で練習を拝聴するのだが、それまでレコードやラジオで聞いていた曲のイメージが一変するのには驚いた。やはり音楽は素晴らしい。音楽が好きになって本当に良かったと思っている。受験勉強はたしかにおろそかになったけれども。

このように卓球部に関係し、オーケストラとも関わりをもち、さらに1994年度と同95年度には富盛伸夫氏のご好意で言語学の講義を持たせてもらい、スペイン語学科以外の語学科の学生たちとコンタクトを持つことができたことは幸いであったと思う。これだけ学生といろいろなコンタクトを持てて、教師冥利に尽きるとはこのことだと思った。

七．終わりに

第五章で述べたように、大学の教師の任務には、管理・運営、教育、研究、啓蒙の4つがある。筆者は管理・運営には全く関心なし、啓蒙にもあまり熱

心になれず、もっぱら教育と研究とに全力を傾注してきた。教育面では、東京外国語大学の最大のとりえは至って小さな大学であることであると信じていた筆者は、少なくともスペイン語学科の学生については全学生の名前と顔が一致するように努めてきたつもりである。年をとるにつれて、学生に対する筆者の識別力に衰えを感じたので、多数の学生に綽名をつけて彼らの示差的特徴をなるべく浮き出させるように努めたりした。また研究面では、全部が全部論文と呼べるかどうかわからないが、とにかく今までに130点の論文を発表してきた。

このように教育と研究に力を注いできた理由というのはひとえに、大学卒業時に5人の候補者のうちから、最も悪い成績の筆者を副手として選んでくださった笠井先生を初めとする、会田、荒井、宮城の4先生のご期待に少しでも報いようと思ったからである。果たして筆者はこれら4先生のご期待に応ええたのであろうか。

考えてみれば、筆者は自分の好きなことだけをやって一生を過ごしてきたようだ。しかも言いたいほうだい、したいほうだい。学問というものが、会田先生がおっしゃったように、既成の権威への反撥であるから、我々研究者はもちろん学問の上でだけであるが、他人および他説への批判を遠慮してはならない。そうすることによって、自分はああはなりたくないという意味で自分自身に対して責任を持つのである。真の批判というのは、批判の相手に対して自信をもって対置できる自分のものがなければ、真に説得力のある、重みのある批判にはならない。しかし筆者のような者が歯に衣着せぬ言辞を弄すると、どうしても敵をたくさん作ってしまう。筆者の人格が練れていないからである。もちろん他人をずばずば批判しても、他人から好かれ、かつ尊敬される素晴らしい人格の持主もいるであろう。しかし筆者は今さらそういう理想的なタイプを羨ましいとも思わない。今からどんなに努力しても、この悪魔みたいな筆者の性格の改造は覚束ないとあきらめているからである。そういう意味で一番迷惑をかけたのはやはり何と言っても女房であろう。あのまま行っていれば、彼女もまた大学の先生になっていたであろうに、夫の

ため育児のために挫折してしまったのである。昔ある女性に「原さんの奥さんは苦労するわね」と皮肉まじりに言われてしまったが、彼女のあの皮肉は見事に当たってしまった。本当に悪い夫であり、悪い父親である。女房の犠牲の上に成り立った学問など偽物の最たるものなのであろう。今頃お詫びしても何にもならないことは明白であるが、お詫びしないよりは少しはましであろう。

そのような筆者でも一つだけ「これだけは絶対に注意せねばならない」という事項がある。実際にそれを守っているかどうかについてはまったく自信がないが。それは教師という商売は、他人に頭を下げられることはあっても、めったに他人に頭を下げる必要に迫られない。従って知らず知らずのうちに傲慢な性格になってしまうのである。自分の非を認めたら率直にあやまる等、人に頭を下げねばならない時には素直に頭を下げるべきだ　ということである。

さて筆者はこれからどうするか。身勝手な話であるが、自分の精神的健康維持のために１、２の大学で非常勤講師としてスペイン語を教え続けることであろう。ボケた頭でお教えするのであるから、教わる方の学生さんはたまったものではない。これについてはあらかじめお詫びをしておこう。しかし世の中よくしたもので、東京大学でスペイン語をお教えした方がやれスペイン語を教えてくれの、言語学を教えてくれのと言ってきてくださる。おかげで70歳までは老骨に鞭打とうかなという元気が出てきた。ありがたいことである。教育の方ではこれでもよかろう。それでは研究の方はどうか。筆者の先輩を見ていて、これは明らかに老害だなあと思えた人が何人かいる。つまり若い人の伸びるのを、自分ではその気がないのに、無意識のうちに阻害してしまう人がいる。筆者はそれにだけは絶対になりたくない。従ってこれからは関西スペイン語学夏期セミナーとか、東京スペイン語学研究会とかにはもう顔を出さないことにしようと思っている。今までの数々の罪滅ぼしの意味をこめて、隠遁の生活に入ろうと思う。それよりも何よりも研究の上でのインスピレーションがさっぱり湧いてこなくなってしまった。以前は気軽に国

際学会に出て行って口頭発表をやったものだが、時差ボケはひどくなる一方だし、飛行機による長旅も辛くなったし、何にも増して研究発表のネタが思い浮かんでこないのだから、やめることにしようと思う。世界中に広がっているヒスパニストたちと旧交を暖めたいのは山々であるが…。これからは研究面では、筆者独自の創出文法理論の体系化を地道に続けて行けばそれでよいのだ。

良き師、良き先輩、良き同僚、そして良き後輩、そして良き学生に恵まれ、実に良き人生であった。悔いはまったくない。

（本稿は1995年７月１日（土）に開催されたエスパニャ会第６回例会において筆者がおこなった「東外大教師生活38年を振り返って」と題する講演を土台にして、のちに筆者が書き直したものである）